

## 雑誌『re@lize』

### 「知らないからこそ読んでほしい、アクセシビリティのこと」 をテーマに取材から制作まで

専修大学文学部ジャーナリズム学科 植村ゼミナール 3年

新井駿弥、宮崎由唯、亀崎勇人、山口由結、井山十萌、大嶋優希、小室亜季、竹下瑞記

#### 1. 雑誌制作目的と背景

当雑誌は、日本国内におけるアクセシビリティについて学生の目線から今現在、どのようなアクセシビリティがあるのかを取材し、雑誌の記事に書き起こすことでアクセシビリティについて全く知識がない人や興味はあるが情報をどこで入手すればよいか困っている人に向けて「知るきっかけ」を提供することを目的として制作した。

アクセシビリティに関する話題は、2023年に筋疾患先天性ミオパチーという重い障害を持つ作家の市川沙央さんが『ハンチバック』で第169回芥川賞を受賞し、その受賞会見でバリアフリーについて言及したのをきっかけに注目度が高まった。

そこで改めてアクセシビリティについて調べ、記事を執筆する中で私たち自身もアクセシビリティとは何なのかを考えつつ、読者と共にアクセシビリティを学ぼうと雑誌の制作を開始した。

#### 2. 事前準備

今回、アクセシビリティをテーマとした雑誌を作るにあたり、私たちは2023年6月にゼミ活動で訪問した新聞博物館での学びを振り返った。性別や障害による差別に焦点を当てた企画展「多様性 メディアが変えたもの メディアを変えたもの」を見

学し、性や障害の多様性について考える機会を得た。これを機に自分たちの身近にあるアクセシビリティに注目し、雑誌制作に取り組んだ。

事前に壁雑誌作りも行った。雑誌作りとはどのようなものかを認識しておく目的で、4人1班でそれぞれテーマを決めて取り組んだ。写真やイラストを用いて読者に興味を持ってもらうことを意識した。雑誌作りにもこの活動を活かし、画像やイラストを駆使して、分かりやすい雑誌作りを心掛けた。

#### 3. テーマの設定

アクセシビリティがテーマに決定してから、それぞれが企画を出すことから始めた。最初は1人10本企画、全員で80本を考え発表があった。それぞれ興味がある分野が異なったことで、身体障害、心の障害どちらに焦点を当てるか、アクセシビリティを取り入れている施設の中でどこに取材するかなど、さまざまな案が出た。

さらに1人3本に絞り込み、希望取材先へのアプローチを始めた。取り上げなかった企画としては「手話サークルへのインタビュー」、観光地での対策について生田緑地を例に「観光とアクセシビリティ」、「スポーツ観戦におけるアクセシビリティ」などがあった。

取材先を探す中で、元の企画から内容が変わったものもある。車椅子利用者へのインタビュー記事は、元はバリアフリーの掛け合わせによって起きる障害についての調査、取材であった。東京都障害者セーリング連盟への取材も、元はスポーツを支える側への取材であった。これも調査を進めるうちに当事者への取材が変わった。

これらのように企画が変化したものもあったが、「障害を知ってもらおう」ということを第一に企画決めを行った。

#### 4. 構成

当雑誌は、特集3本とコラム3本で構成した。全盲というハンデを背負いながらもキャラクターデザイナーとして活躍しているYUKAYUKAさんにインタビューを実施した「全盲のキャラクターデザイナーが拓く未来」、視覚に不自由さを抱いている人に音声で文字情報を届ける音訳について研究した「知れば知るほど面白い！音訳の世界」と、セーリングのパラスポーツ競技に挑む方々にインタビューを行った「海と人、社会との架け橋となる」の3本がメイン特集である。

また、映像アクセシビリティ、車椅子、ノートテイクと様々な視点からアクセシビリティに迫った「映像技術が持つ可能性」「車椅子と共存する」「日常の想像力」の3本をコラムとして掲載した。

巻頭では「知らないからこそ読んでほしい、アクセシビリティのこと」というコピーのもと雑誌制作に対する思いを記し、中面では日本のアクセシビリティの歴史と専修大学のアクセシビリティに関する取り組みをまとめた。

#### 5. 特集①『全盲のキャラクターデザイナーが拓く未来』

雑誌テーマが「アクセシビリティ」に決まってから、アイデア出しをしていった際に生まれた「目が見えない人々は、どうやって文字や絵を書いているのだろうか？」という単純な疑問から派生した企画。大阪府在住のキャラクターデザイナー・

YUKAYUKAさんに写真提供と取材の協力をしていただき、ビジュアルが華やかな誌面に仕上がった。

YUKAYUKAさんは全盲のキャラクターデザイナーだが、だからといって悲観的な文章や、キャラクターデザイナーではなく全盲の人としてのYUKAYUKAさんを描いた記事にはしたくないという思いがあったため、キャラクターデザイナーとしての活躍や今後の展望を中心にした文面にすることを心がけた。

#### 6. 特集②『知れば知るほど面白い！音訳の世界』

アクセシビリティについて考えるにあたり、さまざまな要因で目が不自由になってしまった人の情報獲得の手段として、どのようなものがあるのかを考えた。執筆担当者は図書館のアクセシビリティについて学んでおり、講義の中で「マルチメディアDAISY」が取り上げられたことで、墨字情報を音声にして届ける活動である「音訳」について、取材を行った。

音訳についてなじみがない読者がほとんどではないか、と考え、音訳の概要と歴史をわかりやすく掲載することを目指した。そして、ボランティアベースで行われる音訳の現在と未来について、その世界で活躍

する方々のインタビューを行うことで、読者に「音訳」を立体的に知ってもらえるような記事作りを行った。

## 7. 特集③『海と人、社会との架け橋となる』

「アクセシビリティ」を考えたときに、想定していた読者層である大学生に近い題材を特集したいと思い、スポーツにしようとした。スポーツの中でも、担当者が親しんでいるヨット競技について「健常者でも大変なヨットを障害者は一体どうやって乗っているのか」と疑問に思ったことから生まれた企画である。

東京都障害者セーリング連盟の國松慎太郎さんをはじめとするメンバーの方々が、ヨットと出会いどう人生が変わっていったか、今を楽しんでいるのかを伝えることに力を入れた。その中でヨットにどのような近づきやすさがあったのか、ヨット競技の魅力に迫る特集である。

今回の記事を通して、障害者セーリング競技やボランティアの支援に少しでも興味を持ってもらい、それをセーリング界の普及につなげることができれば幸いである。

## 8. コラム記事

コラム記事 4 本は特集記事以外のアクセシビリティに関する技術や取り組みについてコラム記事として取り上げ、雑誌内容の充実を図ったものである。

私たちの生活にも当たり前存在する映像技術のアクセシビリティについて NHK 放送技術研究所の取り組みをまとめた「映像技術が持つ可能性」では、進化を続ける映像のアクセシビリティについて職員のか

ける思いなどから、取り組みについて読者に興味を持ってもらうことを目的とした。

「日本アクセシビリティの歴史」と「専修大学のアクセシビリティ」では、日本の法律がどのように変化してきたのか、大学では障害のある学生に具体的にどのような支援を行っているのかを中心にした。

「車椅子と共存する—車椅子の歴史とともに—」では、インタビューだけでなく、誰でもが知っていると思いがちな車椅子について、歴史も取り上げることで理解をより深めてもらうこととした。

「日常の中の想像力—ノートテイク知ってますか?—」では、あまり馴染みのないノートテイクについて、読み上げ原稿と実際のノートの画像を掲載し視覚的にもわかりやすい記事を目指した。

## 9. InDesign での制作

編集は Adobe 社リリースの「Adobe InDesign」を使用した。各々考えたレイアウトに沿って記事を編集し、InDesign の使用経験があるデザイン総監督から修正点を指摘して各々修正し入稿をする、という形式をとった。サークルでの雑誌制作を経験したメンバーを中心に編集におけるフォーマットを作り、余白やノブルの位置、段組を全て揃えたため統一感のある誌面に仕上がった。

## 10. 制作から得た課題

制作を通して、いくつか課題が浮かび上がった。

まず 1 つ目は似た内容の記事をしっかりと比較研究する必要があった点である。第 1 稿の段階では、商業雑誌と比べて、色彩

や写真の位置を含めた記事全体の統一感がない記事が多かった。もっと、販売されている雑誌を読み込み、メンバー全員でレイアウトの方向性を定める機会があってもよかったのではないかと感じた。

2つ目に、スケジュールについてである。先輩方からのアドバイスをもとにスケジュールを立てたものの、記事の仕上げに時間がかかってしまい、組版に入る時期が遅れた。また、InDesignでの作業でも、個々人で差が生まれたことで厳しいスケジュールとなった。

3つ目は、読者を意識した雑誌作りと取材ができていなかったことである。私たちは夏休みのゼミ課題で、さまざまな人にインタビュー取材を行い、レポートにまとめる経験した。今回は雑誌を作るということで、ビジュアルメインの紙面を作る必要があった。しかし、多くの記事が報告書のようになってしまう、「アクセシビリティについて全く知らない人」に興味深く読んでもらう原稿ができていなかった。また、雑誌の肝である写真を多く用意できていなかったことも課題として残った。

4つ目は、連携がうまくできていなかった、ということである。

これらの課題は、今後集団で作業をする際にも重要な点であり、全員が意識して改善をすることで、今後、役に立つ経験となったのではないだろうか。

## 11. 学びと結び

雑誌制作という経験したことの無い未知のことが、我々植村ゼミ 12 期生のみで本当に達成できるのか不安になったことを今でも鮮明に覚えている。

実際に雑誌制作が始まり、私たちはテーマに選んだ「アクセシビリティ」について何も知らない状態であり、企画から苦戦するという厳しい始まりとなった。しかし、最終的に雑誌の完成を発表することができて、とても安堵している。

アクセシビリティという今まで深く考えたことのなかった分野に関する取材、そして、それを分かりやすく記事に起こすという作業は、雑誌制作をしたことのなかった私たちにとってかなりの挑戦であった。その挑戦を乗り越えたことで知らないことに対するアプローチの仕方やそれをアウトプットし、他人に伝えるという新たに得た能力があると感じる。この経験を植村ゼミ 12 期生一同これからの人生に活かしていけると強く思う。

### 【謝辞】

本雑誌の制作にあたって、快く取材に応じていただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。

### 【『re@lize』第2号】

発行：2024年1月27日

専修大学文学部ジャーナリズム学科

植村八潮ゼミナール3年生（12期生）

編集長：宮崎由唯

副編集長：新井駿弥

デザイン監督：井山十萌

取材編集：大嶋優希、山口由結、竹下瑞記、亀崎勇人、小室亜季

担当教員：植村八潮

協力：植村ゼミ4年生（11期生）